



Tohoku Univ.
Dept. Hematology
and Rheumatology

血液免疫科 ニュースレター

Vol. 19
(2016年5月)

【発行元】 東北大学 血液・免疫病学分野 (東北大学病院 血液免疫科)
Address: 〒980-8574 仙台市青葉区星陵町1-1 Tel: 022-717-7165 / Fax: 022-717-7497
Homepage: <http://www.rh.med.tohoku.ac.jp/>

巻頭言

医学部の桜も満開が過ぎ、あっという間に葉桜となりました。キャンパス、病院ともに新しい顔ぶれがあふれ、華やいだ雰囲気になっていきます。新人は皆、輝いた顔つきでやる気に満ち溢れており、こちらも活力のおすそ分けをいただいています。当科も新しいメンバーが加入しました。新人のメンバーもいれば留学帰りのメンバーもいて、キャリアも年齢も違いますが、それぞれの立場で医局を盛り上げてくれています。これから大いに期待です。

さて、いろいろと物議を醸している新専門医制度ですが、東北大学も内科プログラムを3月末に申請いたしました。これからプログラム審査となりますが、並行して対象となる研修医への説明会の開催が必要と考えています。さらに、内科プログラムが一段落する前にサブスペ専門医の制度設計も待っています。基本領

域、サブスペ領域、いずれの新専門医制度も、医師のキャリア形成だけでなく、地域医療、医学研究において大きな変化をもたらす制度となるのは間違いありません。これからも引き続き緊張感を持ってプログラム構築を進めていきたいと思っています。

私自身のことを申し上げますと、教授になって9年目、副病院長となつて5年目になり、少し自分の視点が固定化してきているような気がしてきました。管理的な仕事が増えるに伴い、血液学・免疫学の学術的な活動も少し浅くなってきているような危機感があります。私自身だけでなく、教室全体が固定化してしまうのは大変危険です。今年度は、教室の運営についても研究についても、より自由な目線で方向性を再確認するとともに、医局員ともども現状に満足することなく、新たなチャレンジができればと考えています。

今号の内容

| | |
|-------------|------|
| 巻頭言 | p1 |
| 新入局員・スタッフ挨拶 | p2-3 |
| 学会報告 | p3-5 |
| リレーエッセイ | p6 |
| 関連病院探訪 | p7 |
| 人事異動 | p8 |

今年は、我々のルーツである東北大学第二内科開講100周年にあたり、5月の同窓会は記念同窓会として開催されました。100周年の記念同窓会誌も編纂される予定です。この歴史ある教室の流れをより太くするべく、今年度も頑張っていきたいと思っています。

(張替 秀郎)



新入局員・スタッフ挨拶

4月から2名の医局員，1名の移植コーディネータが我々の仲間になんしく加わりました。

星 陽介（免疫，後期研修医）



4月から血液免疫科の後期研修医としてお世話になっております星と申します。東北大学医学部を卒業後，東北大学病院での初期研修（2年間）を経て，はれて免疫科での後期研修を開始させていただいております。医学部入学前に東北大学工学部にて4年間建築学を学んでいたことが特異な経歴かと思いますが，（残念ながら）建築士免許は取得しておりません。震災後の経験を通

じ，「地域に根差した専門医」という医師像を追究したいとの思いに駆られ，免疫科の門を叩くこととなりました。多彩な臨床像からときに診断に苦慮し，予期せぬ経過を辿ることも少なくない自己免疫性疾患と対峙することは，内科医として大きなチャレンジだと感じております。臨床の場で不安を抱えた患者さんに寄り添いながら，日々の研鑽を積んでいきたいと考えております。ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

小野 浩弥（血液，後期研修医）

東北大学血液免疫科に後期研修医として入局させていただきました小野浩弥です。実家は宮城県北部の南三陸町です。仙台第三高校から早稲田大学教育学部国語国文学科，一般企業勤務を経て，平成24年3月熊本大学医学部を卒業しました。初期研修を修めた埼玉県の草加市立病院で血液疾患の奥深さに触れ，ライフワークとして取り組もうと決意しました。幸いにも張替先生はじめ先生方に温かく迎えていただき，現在は病棟業務に慣れ

るべく悪戦苦闘する毎日です。これからしっかりと仙台の地に根を張り研鑽を積むつもりです。謙虚に元気に頑張ります。どうぞよろしくお願いいたします。





加賀 まゆみ (移植コーディネータ)

仙台医療センター付属の看護学校を卒業後、仙台オープン病院に3年、仙台市立病院に22年、南光台やまもと小児科に1年間勤務いたしました。看護師では、内科、循環器内科、小児科、泌尿器科、婦人科病棟勤務の経験をしましたが、移植治療に携わったことはなく、コーディネーターという職種の方も身近にはいませんでした。市立病院での最後の2年間、医事課の所属で情報システム推進室に配属となり、新病院から導入する電子カルテ構築の仕事に携わらせて頂きました。病院の中で、事務職の立場で働かせていただいたこ

とは、私にとって、新鮮で大きな経験でした。今回、移植コーディネーターとして働いてみたいと思ったのも、そのことが影響していると思います。一日も早く仕事を覚えられるよう頑張りたいと思いますので、よろしくお願いいたします。



学会報告① 日本造血細胞移植学会総会 (2016年3月, 名古屋)

第38回日本造血細胞移植学会総会が名古屋第一赤十字病院の宮村耕一先生を会長として、2016年3月3日～3月5日、名古屋国際会議場で開催されました。宮村先生はミニ移植が登場した2000年代前半に東北大学病院血液免疫科で多くの移植を施行され、当院が造血幹細胞移植の拠点病院となる礎を築かれました。血液免疫科からは2題の口演発表を行いました。小林匡洋先生が「Philadelphia染色体陽性ALLに対する同種造血幹細胞移植36例の後方視的解析」と題して、当院および関連病院で臍帯血移植を施行された20例の3年全生存割合 74.8%という結果を示しました。非血縁骨髄移植13例の58.3%と有意差はありませんが、臍帯血移植の有効性を示すことができました。渡邊真威先生は「急性骨髄性白血病および骨髄異形成症候群に対する臍帯血移植の成績：前処置法と病期の影響」の発表で、寛解期に骨髄破壊的移植を施行された17例

の3年全生存割合が94%という結果を示しました。両発表を通じて、東北大学および関連病院において臍帯血移植が有効に行われていることを確認できました。一方で、AML/MDSに対する非寛解期の臍帯血移植は骨髄破壊的前処置群で3年全生存割合が35%、ミニ移植(RIC)群で14%と満足できるものではありません。この群に対してはハプロ移植も導入して、成績の改善に取り組んでおります。また、病棟からは門馬香菜江看護師が「同種造血幹細胞移植後成人患者における心理状態とスピリチュアリティを含めたQOL評価」と題して、移植後患者の心理的適応やQOL全体の向上にはスピリチュアリティへの介入も視野に入れた全人的支援が不可欠であることを発表しました。小生は看護シンポジウム「長期療養を支えるための地域連携へのチャレンジ」(ランチョンセミナー)で宮城県を例に



移植医療と地域連携について発表させていただきました。全国に東北地方の移植を紹介できる貴重な機会となりました。学会後は木村淳先生にセレクトいただいた素敵な場所で小

児科と一緒に盛大な会が催されました。移植の本拠地、名古屋の移植学会は大変充実した刺激の多い学会であったと思います。

(大西 康)

学会報告② ～日本リウマチ学会総会～

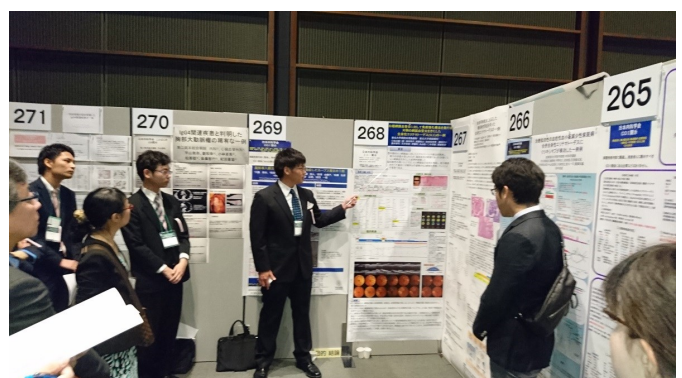
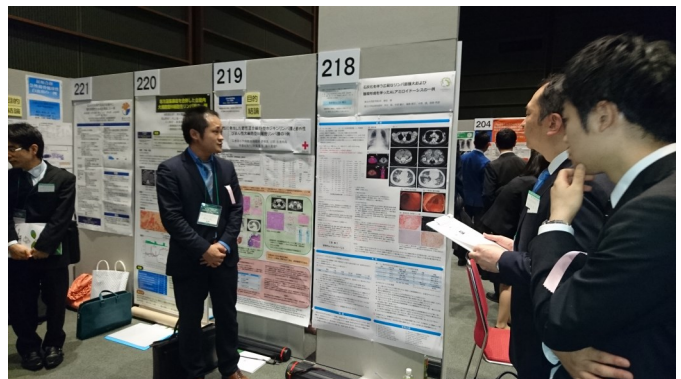
4月21日(木)～23日(土)に横浜で開催されました「第60回日本リウマチ学会総会・学術集会」におきまして、当科からは以下の演題を発表いたしました。

- 当科におけるIgG4関連疾患の治療介入について (ポスター) 藤田 洋子 他
- Longer suppression of anti dsDNA antibody by sequential therapy with bortezomib and cyclophosphamide in lupus model mouse. (口頭) 藤井 博司 他
- 難治性全身性エリテマトーデスに対するボルテゾミブの有効性・安全性探索試験 (第II相他施設共同プラセボ対照無作為二重盲検並行群間比較試験) (口頭) 石井 智徳 他
- 抗ARS抗体陽性の多発性筋炎, 皮膚筋炎の臨床的特徴 (口頭) 武藤 智之 他
- 膠原病関連肺動脈性高血圧症 (CTD-PAH)における活動性・長期予後の検討—集学的免疫抑制療法の効果について— (口頭) 城田 祐子 他

学会報告③ ～日本内科学会総会～

今年も、日本内科学会総会と同時に開催された「医学生・研修医の日本内科学会ことはじめ」において、医学部6年生の2名の高次修練の学生さんに演題を発表してもらいました。

免疫グループからは、石川健一朗君が、“右眼網膜血管炎に免疫抑制療法を施行後、対側の網膜血管炎をきたした全身性エリテマトーデスの1例”について発表しました。数か月にわたり病態を学び、専門書を熟読してラストスパートをかけてよく勉強されました。当日はとても堂々と発表し、優秀演題賞を受



賞されました。今後のご活躍が楽しみです。

血液グループからは、藤田剛君が「石灰化を伴う広範なリンパ節腫大と腫瘤形成を伴ったALアミロイドーシスの一例」について発表しました。非常に特異な所見を伴ったアミロイドーシスの一例で、見慣れない疾患でもあったため、症例の所見・経過を理解するには中々骨が折れたことかと思いますが、文献を詳細に検討し、内容的にもすばらしい発表をしてくれました。

二人とも学生とは思えないほど大変しっかりとした発表で、その結果、なんと二人とも優秀演題賞を頂くことができました。

(市川 聡, 城田 祐子)



3月某日 内科外来菅原礼子さん送別会



当科ホームページ上で昨年末から、印象深かった症例、医療に対する意見、人生観など、自由なテーマで、スタッフの雑感を掲載する「リレーエッセイ」を始めましたので、ご紹介いたします。

「学生との雑談」

以前はSGTの最終日に打ち上げと称して医局で学生と飲んでた。学生さんとアカデミックな話や下世話なことまでいろいろ話をする機会があった。トイレと間違えて教授室に入っていく者、家からギターを持って来て弾き語りする者、オセロ盤を持ち歩き勝負を挑む者、スクラムを組む者など実習時間中にはとうてい見られない面を見ることが出来た。自己紹介の時は皆真面目で我々の頃とは洗練された印象があるが、数時間も飲んでると我々が学生の頃と変わらず、優秀かもしれないがアホで面白いやつがまだまだいると安心できた。

SGTの担当教官にあたってはいるものの最後の症例発表の準備に終始してしまい、最近は医学生の方々とゆっくり雑談をする機会がめっきり減ってしまった。ほぼ毎週、外来実習と称して学生さんが着く。大抵多くの患者をさばかなければならない時間であり雑談をする時間もあまり無い。患者の説明と質問を淡々とし

ていく。たまに患者が切れたときに雑談をする。ただし実習時間内なのでできるだけアカデミックな話ができるように「基礎修練はどこ行ったの？何やってたの？」という話から入ることが多い。学生のacademic interestが分かれば、私自身の勉強のためにも実験手技のことや、その分野の最近のトピックなどの話を聞かせてもらうようにしている（話の内容はピンキリであるが）。ほとんどの学生さんは進んで話しをしてくれるし、私自身の話をすることもある。ここまでできれば今の私の学生教育の中では一番有意義な時間かもしれない。こういう雑談の時間が長くなれば自身の分野の面白さをもっと話できるのだと思う。全員に同じことが出来るわけでもないのでカリキュラムとするのは無理だと思うが、学生と互いのacademic interestについて雑談するというのも教育の一つのなりうるのではないかと思う。

（藤井 博司）

「リレーで渡すもの」

他分野の同期の医師からも、「なんでそんなに休まないの」と言われる血液免疫学での診療や研究。自分はそのままでと思わないが、頑張る理由の一つは、得られる成果や印象深く響くような体験かもしれない。

高校までグラウンドホッケー部だった。厳しく練習する先輩についていけず辞める者が多く出た。当時、PKOが話題で、派遣の方が楽だという冗談もあった。厳しい練習の結果、驚いたことに、例年は大敗した強豪校と接戦、ついに勝利した。「スラムダンク」のようであった。それを目の当たりにした者は部活に残った。厳しいだけでもいけない難しさ、後に分かる得られるものは伝えきれない。糧になる感動の体験がないことは、かわいそうとさえ思えた。何かの本で、「言わないと分からないようなことは、言っても分からない。」とあった。先輩もそんなことを言っていた。体験を後輩に受け渡すのだと言った。

自分は当初、血液疾患を苦手と感じた。しかし、分子標的薬や移植で、驚きの成果を体験した。患者さんとご家族の笑顔も見た。それでもまだ基礎研究での謎

は果てしない。自分は学部生時代に実験の経験が乏しく、大学院では基礎研究が苦手と思いながらも、なんとか取り組んだ。「この道を行けばどうなるものか」の連続だった。最も印象深い体験は、成果とまでいかないが、「第19回 血液科学セミナー」だった。発表に対し、全国の先生から今まで体験したことのない量の質問が続いた。頑張りの蓄積が、聴衆の先生方に響いたと感じ、なぜか質疑応答の最中に、この上ないうれしいことに思えた。「言わないと分からない・・・」かもしれない。血液関連の先輩方は、強敵に挑む姿などは「坂の上の雲」、仙台に関連すれば「青葉繁れる」の先人や先生のイメージだ。大船に乗ったつもりで、診療や研究に没頭でき、感謝している。苦手でも、病気とぶつかって「迷わず行けば」分かってくるものがある。成果とならなくても、松陰先生の「身はたとひ」のように思えればうれしい。自分は先輩の体験を受け継いでいけるか、後輩に受け渡せるのだろうかと思った。

（小林 匡洋）



関連病院探訪 ～第1回 仙台医療センター 血液内科～

今号から、関連病院の先生方に自施設の紹介を頂く「関連病院探訪」の掲載をはじめました。第1回は仙台医療センター血液内科 横山 寿行 先生です。

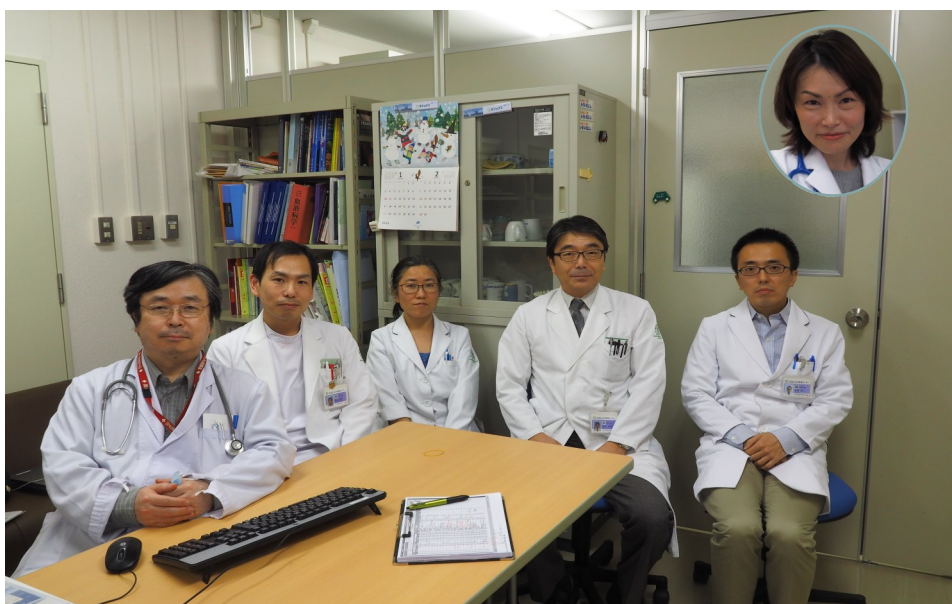
国立病院機構仙台医療センター血液内科は目黒血液内科部長、伊藤感染症内科医長を始め、勝岡、横山、猪股のスタッフ5人で診療を行っています。当院は血液内科以外の科が充実していること、使用できるベッド数が比較的恵まれていることが特徴で、このため若年から御高齢の患者さんまで、軽症例から重症例まで幅広い患者さんへの対応が可能です。昨年は外来新患者数740例、重複を除いた入院患者数は273例で、その内訳は悪性リンパ腫100例、急性骨髄性白血病45例、急性リンパ性白血病18例、多発性骨髄腫26例、骨髄異形成症候群34例などでした。

最近の当院のニュースとして、平成26年6月より非血縁者間同種骨髄移植診療科・採取施設に認定されたことがあります。以前より血縁者間移植や臍帯血移植を中心に行ってききましたが、非血縁者間骨髄移植の選択肢が増えたことでより適切なドナー選択ができるようになったと感じています。移植症例数も年々増加し、昨年は40例（同種移植28例、自己末梢血幹細胞12例）と年間最多を更新しました。もう一つの出来事としては、平成27年度より血液内科のベッド数が48床に増えたことです。これまでは、他病棟に入院患者

さんをお願いすることも多々ありましたがその頻度もだいぶ少なくなりました。

病院自体の環境も今後変わっていきそうです。昨今の社会情勢の影響を受け計画が遅れていた病院建て替えの計画ですが、ようやくめどがつき、数年後には隣接する新しい場所に移る予定となりました。また、広瀬通から続く大通りが当院すぐ横まで延びる工事が進んでいます。もともとJR仙石線宮城野原駅から徒歩でと電車での方が良い場所にありますが、車でも来院しやすくなるのではないかと期待しています。

今後の当科の目標は、診療の質をさらに向上させることです。そのためには、次々に出てくる新規治療についてだけでなく、コメディカルの方々とより連携していくことが重要と考えています。もし質の向上によって入院期間が短縮できれば、さらに多くの患者さんを受け入れることも可能ではないかと思っています。これからもこのエリアの血液内科診療に貢献できるよう頑張っていく所存ですのでどうぞよろしくお願いいたします。





人事異動

2016年3月～5月の当科の人事異動についてお知らせいたします。

【2016年4月】

白井 剛志（免疫） Stanford University → 血液免疫科 助教

那須 健太郎（血液） 博士課程卒 → 血液免疫科 医員

石井 悠翔（免疫） 東京女子医科大学 膠原病リウマチ痛風センター
→ 血液免疫科 大学院生

星 陽介（免疫） 東北大学病院 卒後研修センター
→ 血液免疫科 後期研修医

小野 浩弥（血液） 草加市立病院 → 血液免疫科 後期研修医



4月某日早朝 北三番町公園の桜と木町通小学校